

視察結果報告書

東松山市議会議長

齋藤 雅男 様

会派名 清和会

代表者名 井上 聖子

月 日	視 察 地	視 察 内 容
10月11日（金）	岩手県	オガールプロジェクト
	紫波郡紫波町	循環型まちづくり・環境について
		以上、視察に関し別紙の通り報告いたします。

## 1 岩手県紫波郡紫波町

- ・視察者 井上聖子、斎藤雅男、平澤牧子
- ・視察場所 紫波町フットボールセンター
- ・視察日時 令和6年10月11日（金） 午前10時～正午
- ・視察項目 オガールプロジェクト 循環型まちづくり・環境について

### ・視察目的

「循環型まちづくり」の象徴的な事業から、地元資源を最大限活用し、公民連携を通じて持続可能な地域活性化を実現している「循環型まちづくり」事業の取り組みについて学ぶ。

### ・要旨（報告事項）

農村と都市の新しい結びつきを目指した取り組みとして多くの学びがあった。とりわけ先見の明を持つ町長と経験豊富な市民が連携し、2年間で100回以上の説明会を開催。これを通じて循環型社会の在り方を議論し、オガールプロジェクトにたどり着いた。公民連携の仕組みによる多機能施設の整備が、住民交流や地域経済の活性化に寄与している。特に、地元資源を最大限活用する姿勢が印象的で、全国的なモデルケースとなる可能性を強く感じた。～100年後の子どもたちに紫波の環境をより良い姿で残す～という「新世紀未来宣言」からもわかるように市民の思いが中心となったプロジェクトである。説明会の粘り強い取り組みが、この成功を支えていると実感した。

### 【紫波町の概要】

◇面積 : 238.89㎢ {東松山市: 65.35㎢、 約3.65倍}

◇人口 : 32,760人(令和6年5月末時点)

{東松山市: 92,369人(令和6年6月1日時点)、約1/3}

◇世帯数 : 約13,000世帯

◇アクセス 鉄道 3駅（紫波中央、日詰、古館）

紫波中央～盛岡間16.7km、21分

道路 東北自動車道紫波IC

(紫波IC～浦和IC 490km)

### 【人口動態】

2005年には世帯数が約10,400世帯、2024年までの約20年で2,600世帯増。一方、人口は2005年には34,600人だったのが約1,800人減少。

岩手県内の中では若い人たちが移住先として選んでくれている。

### 【農業とお酒の町】

主な産業・・・もち米の産地、

フルーツの里（りんご、ぶどう、洋梨など）

南部杜氏発祥の地

紫波もちもち牛、しわ黒豚

- ・稲作が中心。もち米の産地で、10年前までは作付面積全国1位だった。（平成の合併後、順位が下がった）そのほとんどは新潟に送られる（さとうの切り餅）。果樹はりんご、ぶどうの産地（今年は一昨年と比べて暑さや雨の影響で取れ高は半分以下）。冬は農業の仕事がないので、一般的に出稼ぎに出る。
- ・南部杜氏として日本酒の酒蔵で有名。
- ・ぶどうの収穫量岩手県内1位。フルーツパークというワイナリーを作った。
- ・大麦を作り2024年からビールも作るようになった。
- ・今まではりんごをジュースにしていたがお酒にすることになる。
- ・地酒の消費拡大や普及促進を図り、酒類製造業や農業をはじめとする産業の振興に寄与することを目的とした、「紫波町の地酒で乾杯を推進する条例」が平成29年4月1日に施行された。この条例は個人の嗜好や飲酒に対する意思を尊重しつつ、町の地酒による乾杯の推進を求めるものであり、「みんなで声かけをして地酒での乾杯を広め、町に4つある酒蔵とワイナリーでつくられたお酒を堪能しましょう」と呼び掛けている。

### 【紫波町の循環型まちづくり歴史】

1998年：「紫波中央駅」が開業すると共に駅前開発のため公共用地を取得したところから始まる。（10.7ha・28億5,000万円で購入）

2000年：「新世紀未来宣言」を発表。

～100年後の子どもたちに紫波の環境をより良い姿で残す～

2001年：第一次紫波町総合計画（策定）

紫波町環境循環型まちづくり条例（制定）

「町民・企業・行政三位一体」の理念

2003～2004年：

- えこ3センターの整備

命名の由来：エコノミー（経済的で）

エコロジー（生態・環境を重視し）

アースコンシャス（地球を意識する）

（1）堆肥製造施設〔有機資源循環施設〕

## (2) ペレット製造施設〔未利用森林資源の活用〕

紫波町の6割が森林。

紫波町の資源赤松が松食い虫の被害に遭い、被害木が多くあった。

間伐材：弱い木や曲がった木を間伐、間伐をすると根をしっかりとって、雨でも倒れない。

森を手入れしないと動物が里に降りてくる。

20年前は循環型のまちづくりは珍しかった。

まず初めにやったことは、平成22年に野積みが禁止（衛生上よろしくないため禁止）農家困っていた

牛、豚、鶏の畜糞で、堆肥活用センターを作る（エコ3センター）

家畜の排泄物や事業用生ごみ、有機資源+間伐材を利用したペレットを作る工場を整備

問題▶外国産の機械を導入したので、故障し直せないのので3年前に停止  
町内の木から県内の木へ基準をゆるくする

エコ3堆肥で作った野菜を給食センターへ

紫波町には焼却センターが無いので燃やせるゴミを分別する。

### ●森林資源の有効活用

木材の使用減少を食い止めるため、2000年以降公共施設は全て木材を使用。

森を維持するために、子供たちと植林を開始。

木材を使用することで、大工さんの技術の伝承に貢献。

大手ゼネコンが入りにくい仕組み作りのため必ず町産木材を使用すること、町内の工務店建設会社を使用することなどを条件にしている。



- 2004年：盛岡地域合併問題協議会「不参加表明」  
持続的に自立できる紫波町行財政計画（自立計画）策定
- 2005年：自立計画実行初年度  
「経営品質会議」設置。岡崎正信氏も委員になる。
- 2006年：地区創造会議に着手（地域づくり活動）  
町長が「公民連携手法」で紫波中央駅前町有地の開発を進める旨を町幹部に指示
- 2007年  
4月：東洋大学と協定締結（公民連携元年）  
8月：紫波町 PPP 可能性調査報告書（東洋大学大学院公民連携専攻作成）
- 2008年：市民が主役の自治仕組みづくり 市民参加条例（4月1日施行）  
市民の公益活動の環境づくり  
・中間支援センター、まちづくりコーディネーター養成講座、  
地域づくり活動補助金  
地域課題に取り組む地域コミュニティづくり  
・1町8ヶ村において「地区創造会議」の実施
- 2009年  
2月：紫波町公民連携基本計画策定  
3月：都市再生整備事業（紫波中央駅前地区）策定  
6月：オガール紫波株式会社設立
- 2010年6月：オガール・デザイン会議設置
- 2011年4月：岩手県フットボールセンター開場
- 2012年  
6月：官民複合施設オガールプラザ オープン  
8月：紫波町図書館 開館（オガールプラザ内）
- 2013年10月：オガールタウン 日詰二十一地区 宅地分譲開始
- 2014年  
6月：民設民営エネルギーステーション 完成  
7月：民間複合施設オガールベース 完成
- 2015年  
5月：紫波町役場新庁舎 開庁
- 2016年  
12月：官民複合施設オガールセンター 完成
- 2017年  
4月：民設民営オガール保育園 開園

### 【新世紀未来宣言】

日本の文化の源流は農村の山ひだにありました。  
森の中から水が湧き、人々は集い、  
集落を形成し、自然と共存し、  
自然を崇拝してきました。

厳しい自然に耐えた集落には、  
先人の知恵の結晶ともいうべき  
生きるための哲学があり、  
連綿と伝えられてきました。

モノを粗末にすることは、  
すなわち生命（いのち）を粗末にすることにつながります。

モノを大切にすること、生命を育むこと、  
郷土の文化と伝統を伝えていくことを  
百年後にも引きついでいきます。

母が見た風景を、浴びた陽の光を、  
感じた風を、清冽な水を、  
そして紫波の環境を百年後の子どもたちに  
よりよい姿で残し伝えていきます。

### 【オガールプロジェクト概要】

紫波町は、JR 紫波中央駅の町有地 10.7ha を中心とした都市整備を図るため、町民や民間企業の意見を伺い、平成 21 年 3 月に議会の議決を経て紫波町公民連携基本計画を策定した。この計画に基づき、平成 21 年度から始まった紫波中央駅都市整備事業が「オガールプロジェクト」である。

- 事業期間 〈H21.4～H26.3〉
- 概算事業費 〈公共分：19 億 4 千 5 百万円〉
- 町有地 10.7ha のうち民間活用想定面積 約 4.5ha

### 【オガールの名前の由来】

東北地方で成長を意味する【おがる】と駅を意味するフランス語【ガールGare】『紫波中央駅前』を紫波の未来を創造する出発駅とする決意と、このエリア

を出発点として紫波が持続的に継続していく願いを込めた。

### 【オガールの施設】

- オガール広場/オガール大通公園▶紫波町の象徴である田園風景と都市空間をつなぐオガールエリアのシンボリックな場所「担い手づくりワークショップ」で出された市民の意見が、デザインコンセプトに生かされた。広場両側の建物の1部分に設けられたアーケードによって、建物と広場が一体となった空間が創出され、建物内の活動が広場へ、広場の活動が建物内へと行き交う。夏はバーベキュー、冬は雪遊びと四季を通じて憩い、集う人々の姿が見られる。
- 役場庁舎▶PFI手法(BTO方式)で整備された新庁舎は、4カ所に分散していた庁舎機能を1カ所にまとめ、防災拠点としての機能を備えている。町民に親しまれ、機能性、利用性の高い庁舎を目指す。
- オガールタウン▶特徴：紫波町が宅地57戸を分譲。町産材活用、指定事業者が建築、紫波型エコハウス基準
- オガールベース▶日本初のバレーボール専用体育館、ビジネスホテルのほか、コンビニエンスストアや飲食店、事務所等が入居する民間複合施設。体育館を活用した合宿やスポーツアカデミー事業などを展開するとともに、近隣の岩手県フットボールセンターや紫波町営自転車競技場とも連携し、スポーツを通じた教育環境と人材育成の充実を目指す。
- オガールプラザ▶紫波町情報交流館(図書館と交流館)と子育て応援センターの公共施設と、農産物直売所やカフェ、居酒屋、歯科、眼科、学習塾などの民間施設で構成されている官民複合施設。「知りたい、学びたい、遊びたいを支援する」図書館に代表されるように、多様な活動やニーズに応える拠点として子供から高齢者まで幅広い年齢層が訪れる。
- オガールセンター▶教育サポート施設、小児科、病時保育、アウトドアショップやスポーツジム、ベーカリーや美容室が入居し子育て環境の充実を図りながら周辺の施設と連携し、ライフスタイルを提案する複合施設。
- エネルギーステーション▶木質バイオマスボイラーを主な熱源として地域内熱供給を行う施設。町産木質チップを燃料に、役場庁舎、オガールベース、オガールタウンへの冷暖房・給油用の熱を供給。
- オガール保育園▶民設民営「共に作り出し、共に助け合い、共に栄える子ども」を育てる。
- 岩手県フットボールセンター▶日本サッカー協会公認のグラウンドであり、各種公式試合や幅広い世代のトレーニングセンターとして機能を持つ一方、様々なイベントを開催することで、サッカーを通じた交流人口の増加や街の

経済発展に寄与している。さらに、「サッカーによる人材育成」を積極的に行っている事業主体である岩手県サッカー協会は、オープンと同時に本部を盛岡市から紫波町に移転し運営している。

- ・視察結果、所感

紫波町のオガールプロジェクトにおいて、20年前という循環型社会の概念がまだ珍しかった時代に、藤原町長と岡崎正信氏が2年間にわたり100回の説明会を実施し、町民の賛同を得たことに深い感銘を受けた。この粘り強い取り組みの背後には、未来の子どもたちや国土への愛が根底にあることが【新世紀未来宣言】の内容からも明らかである。プロジェクト成功の鍵は「人」であり、地域の知恵と情熱が軸となって循環型社会の実現に結びついたことに大きな意義を感じた。